アイキャン会報 「こどものこえ」2018 年 9 月号

ICAN Children's Voices 2018 68

2017 年 11 月～2018 年 4 月（2017 年度後期）を振り返って

ICAN 事務局長
井川　定一

アイキャンのマニラの路上の子どもたちの環境を改善する活動は、今年で 12 年目になりました。現在までに、路上での教育や栄養改善、奨学金の提供、親や行政への介入等の活動を行い、多くの子どもたちが教育を受け、子どもらしい生活を取り戻してきました。会員や寄付者、賛同者、ボランティアの皆さまに心から感謝いたします。

もちろんすべての子どもたちが、幸せな結末を迎えた訳ではありません。2013 年頃にアイキャンの活動に参加していたマーク君（仮名）もその内の一人です。当時、活動を通じて、多くの路上の子どもたちが、路上から出て、学校に通いたいと訴えていました。しかし、マニラ中の児童養護施設は常に満員状態が続き、入所までに半年から一年も待たなければいけない状況でした。マーク君も、他の子ども同様に施設に入り、復学を希望していましたが、入所まで何ヶ月も待っている間、生き伸びていくために犯罪組織に使われ、最後に殺されてしまいました。路上から出たいと訴えていた子が、殺されてしまったことは、私たちにとってとても衝撃的な事件でした。

その年、私たちは話し合い、自ら児童養護施設を作ることを決心しました。土地と塀、最低限必要な 1 階部分だけでも 4,000 万円近く必要な中、建設決定直後に、フィリピンレイテ島を未曽有の台風が襲い、児童養護施設に予定していた寄付の大半を失い経営危機にも陥りました。それでも路上の子どもたちの命に関わる活動であるため、計画をそのまま実行する判断を下した時、多くの方が趣旨を理解し、ご寄付をしてくださりました。その中には、家を売却した私財をもとに大口の寄付をしてくださった名古屋に住む闘病中の女性、亡くなった奥様の意思をもとに大口の寄付をしてくださった仙台に住む男性を含みます。それらの資金によって、2016 年児童養護施設「子どもの家」は完成し、運営を開始いたしました。完成したときは、とても感動したことを今でも覚えています。

今期、アイキャンの児童養護施設「子どもの家」の 2 階部分を増築するために、建築会社との打ち合わせを進めました。1 階部分だけでは、子どもは 10 名以下に抑える必要があり、2 階部分までできると、30 名～50 名の身寄りのない子どもたちが継続的に生活できることになります。今後、10 月から建設を開始し、約 5 ヶ月での完成を見込んでいます。建設には、約 1,000 万円のお金が必要です。裏ページに寄付募集について記載をさせていただいておりますので、ぜひご協力をお願いします。

今期は、この児童養護施設の建設以外にも、代表理事の交代やイエメン難民の子どもの保護の活動の強化、ミンダナオ先住民の子どもの学用品の提供等、多くの活動で進捗がありました。どうか本誌にて、活動報告をご覧いただき、引き続き、ご協力いただけますと幸いです。私たちを信じて、ご寄付を預けてくださった皆様のご期待にお応えできるよう、最後まで責任を果たしてまいります。いつもアイキャンの活動を応援していただき、心より感謝申し上げます。

特集１：新代表理事・直井恵が就任しました。

皆さま、こんにちは。この度、アイキャンの代表理事に就任させていただきました直井恵です。2001年から2005年の間、名古屋駅前の古い雑居ビルの一室を2団体で共有して事務所を構えていた時代、日本事務局の職員として働いていましたので、もしかしたらお会いしたことがある方もいらっしゃるかもしれません。最近では、私の母校である長野県の高校が偶然、アイキャンの事業地を訪れるフィリピン研修を行うことになったことで、引率として、アイキャンの事業地を訪問させて頂いています。パヤタスゴミ処分場の「お母さん」は、「お婆ちゃん」になり、まだ20代で若かった私も3児の母になりました。約10年ぶりにパヤタスを訪れ、昔から変わらない底抜けに明るい彼女たちの姿とともに、そこには変わらない「社会の構図」を感じました。

信州の田舎街で生まれ育ち、アジアやアフリカに強く憧れていた中高生時代を経て、私がNGOに出会ったのは大学時代でした。国際開発を専攻する中で、NGOの献身的な取り組みに惹かれ、ボランティアをするようになりました。その後、アイキャンの職員として働く機会を得て、パヤタスというあの巨大なゴミ処分場とそこで暮らすお母さんや子どもたちと向き合う日々が始まりました。2001 年の当時は何百人もの方が亡くなった崩落事故が起きた直後で、パヤタスは、子どもたちのデイサービスから女性の生計向上プログラムまで、各国の団体による多くの活動で溢れていました。その後、2005年までの数年間でしたが、あのパヤタスの底抜けに明るいお母さんたちと出会ったことは、私の人生を大きく意味付けました。もともと自然豊かな地方で生まれ育ったというお母さんたちが、「なぜパヤタスに来たのか」という私の素朴な問いは、いつしか日本で暮らす私自身のライフスタイルを見つめ直すことに繋がっていきました。結婚と出産のタイミングも重なり、私は、地元の長野県に戻りました。子育てで精一杯だったこともあり、しばらくNGOという言葉にさえ触れる機会はほとんどありませんでしたが、今こうして再びアイキャンと繋がり、まだ自分に「お役目」があるのだと感じるようになりました。

前任の代表理事の田口さんには、職員として働いていた当時、様々な相談に乗っていただき、支えていただきました。よく事務局会議で終電を逃し、田口さんに車で家まで送って頂いたことを覚えています。あの小さな小さなアイキャンだった時代から、この現在まで代表という座で暖かく職員やボランティアの皆さんを支えてきてくださったことを思うと、田口さんの果たした功績は並大抵のことではないはずです。心から感謝いたします。私は、今、この混沌とした世界の中で、アイキャンに関わるあらゆる人々が身の安全を保証され、特に弱い立場に置かれた人々が、きちんと声をあげられる社会をつくっていきたいという思いでいっぱいです。そして、それを支えてくださる多くのボランティアや寄付者、職員の皆さまが、その志を社会に還元できるように、アイキャンができることをみつめていきたいと思っています。世界が平和に向かっていくことを祈って。

新代表理事　直井恵

フィリピン人スタッフと

職員時代の会議参加の様子

職員時代の事業地訪問の様子

特集 2：イエメン紛争下に生きる女性のこえ

イエメンの首都サナアにて活動するイエメン人アイキャン女性スタッフ、アフラからの報告です。

イエメン紛争に生きる女性のこえ

もともと自給率が 10%に満たない中東の最貧国イエメンでの暮らしは、紛争が激化して 3 年以上経つ中、日々厳しさを増しています。イエメン国民の 2/3 にあたる 1,780 万人が食糧不足に陥り、更にその内の 840 万人は外部からの食糧提供に全面的に頼らなければ生存ができない「極度の飢餓状態」 にあります。

中でも厳しい立場にあるのが女性たちです。イエメンでは伝統的に、男性が外で仕事をし、女性は家を守ってきました。しかし、収入を得ようと多くの男性が入隊し、前線で死傷したため、女性も収入を得るのに必死です。また、上水も紛争で寸断され、給水車で運ばれてくるきれいな水を、女手で往復 2～3 時間かけて運んだり、ガスも入手できなくなっているため、薪を集めたりする必要もあり、生きることに精一杯の日々が続きます。2 年前に紛争で夫を亡くしたアイーシャさんもそのような女性の一人です。彼女は言います。「私は、生活の糧を得られなくなったため、裁縫を学んで服を作っていますが、まだ技術が十分ではなく、安い値段でしか売れません。また家事の時間がかかるので、服の製作に割ける時間も限られ、収入は十分ではありません。生活は苦しくなる一方です。」

アイキャンは、2015 年 12 月よりイエメンで活動を開始しました。深刻な食糧不足に陥っている国内避難民 300 万人のうち、特に西海岸 3 州に 4 割が集中していることから、活動開始以降、同国西海岸地域にて、継続した食糧提供を行っています。家族を多く抱え、物価高の中で何とか生き延びる人々、特に女性たちにとって、食糧提供は何にも代えがたいものです。小麦や米、豆の提供を受けられたため、玉ねぎやトマトを買って少しでも栄養のある食事を作れるようになったと、これまでの食糧提供実施地で何度も女性たちの声を聞いてきました。また、食糧の心配をしなくてよくなったことで、子どもの薬や生活必需品を買うことができたという声も、よく聞かれます。

食糧提供は、単に生き延びる手段を齎すだけではありません。紛争で故郷を追われたマリヤムさんは、「家を出てからは、人に頼み込んで食べさせてもらうことも多くありました。そんな生活は、人間としての尊厳が奪われていくようでした。アイキャンから食糧の提供を受け、尊厳を取り戻すことができました。」と話してくれました。私は、今、イエメン国内の最も困難な場所で、最も求められている活動を行うアイキャンの活動に誇りを持ち、同じ女性として、これからも、弱い立場に立たされた女性たちが笑顔になれる仕事を、アイキャンの一員として担っていきたいと思っています。

女性への聞き取り調査

1 家族 1 ヶ月分の食糧

国内避難民の母子

男性への聞き取り調査

2017年11月～2018年4月のアイキャンの活動

Ⅰ　危機的状況にある子どもたちとともに行うプログラム

※アイキャンの事業年度は毎年5月1日に始まります。

路上の子どもたち　～子どもの家の改築手続きを開始～

児童養護施設「子どもの家」では6名の子どもに食事提供や健康管理、通学経費の補助を行い、元路上の子どもが運営するカリエカフェでは、技術訓練研修を13回実施し、延べ128名が参加しました。

ごみ処分場周辺地域の子どもたち　～マニラのバザーに参加～

SPNPメンバーが今期12回の会議を開催し、売り上げ向上のための戦略、新商品の開発、価格の再設定について話し合いました。また、3つのバザーへ参加し、フェアトレード商品を販売しました。

先住民の子どもたち　～452名に学用品一式を提供～

2018年1月、ブキドノン地方の山奥に位置する先住民地域において、6つの小学校の合計452名の児童に、学用品一式（鞄、鉛筆、消しゴム、ノート等）を提供し、教育環境の向上に貢献しました。

ジェネラルサントスの子どもたち　～家庭訪問を実施～

2018年1月の大学の新学期に合わせ、4名の奨学生への家庭訪問を実施しました。また、現在は先住民の村で教師になっている卒業生を訪問し、卒業後のモニタリング調査を行いました。

紛争の影響を受けた子どもたち

①　フィリピン　～平和を推進するための研修の実施～

ミンダナオ島ピキット町の2つの村で、平和推進に関するミーティングを実施し、村役員や地域有力者が129名出席しました。また、MILFメンバー延べ57名に対して平和研修を2回実施しました。

②フィリピン　～国内避難民353世帯への食糧等の提供～

ミンダナオ島マラウィ市の避難所で生活をしている201世帯と、サグイラン町で避難生活を送る152世帯の国内避難民に対し、米や缶詰等の食糧、そしえバケツや皿等の生活必需品を提供しました。

③イエメン　～国内避難民9,642世帯への食糧提供～

イエメンのハッジャ州・ホデイダ州・タイズ州において計9,642世帯へ食糧の提供を実施しました。これまでは現地NGOを通じて食糧を購入していましたが、今期から直接購入に切り替えました。

④ジブチ　～「子どもの広場」に新しい遊具を設置～

週5回「子どもの広場」の活動を実施するとともに、新しい遊具及びスポーツ用品を整備しました。また、活動を担うアニメーター10名を対象に、子どもの権利や運営に関する研修を2回実施しました。

今期のメディア等への掲載（32件）

2017年12月2日	熊本日日新聞　カリエカフェについて
2017年12月3日	中国新聞　カリエカフェについて
2017年12月3日	La nation　在ジブチ日本国大使館の新井大使が、アイキャンの活動を高く評価
2017年12月7日	京都新聞　カリエカフェについて
2017年12月9日	信濃毎日新聞　カリエカフェについて
2017年12月14日	静岡新聞　カリエカフェについて
2018年1月22日	中日新聞　ミンダナオ島、書き損じはがき募集について
2018年2月1日	UNHCR　ジブチでのアイキャンの活動について
2018年2月13日	電気新聞　中部電力エコポイント活動(スカイプ)について
2018年2月14日	THE PAGE　イエメン難民の現状、ジブチにあるマルカジキャンプについて
2018年2月22日	コンパクト・シー2018.3　　1/22の中日新聞掲載記事紹介
2018年2月28日	Aden AlGhad、Alsalam News、Alhudeaidah News、Alyemen Alarabi、Almashahad Alarabi、Yemen Press イエメン・ホデイダでの食糧提供について（6件）
2018年3月17日	TV Yemenチャンネル、Suhailチャンネル、Yemen Shababチャンネル　タイズでの食糧提供について（3件）
2018年2月20日	Aden Post　タイズでの食糧提供について

Ⅱ　「できること（ICAN）」を増やすプログラム

国際理解教育事業　～絵手紙交流に 3,410 名が参加～

小学生～社会人、1,087 名に対し、フィリピンやイエメンの子どもたちについての講演を行いました。また、「平和な社会にあるもの」というテーマの絵手紙交流を実施し、計 3,410 名が参加しました。

フェアトレード事業　～2 つのイベントに出店～

ふれあいフェスタ（名古屋）と、ワンワールドフェスティバル（大阪）に出店しました。インターン 1 名とボランティア 4 名が担当し、フェアトレード商品を販売するとともに、意義や価値を伝えました。

チャリティ語学教室事業　～新規で 3 名の生徒が入会

新たに 3 名の生徒が入会し、英語・タガログ語のレッスンを実施しました。英語によるクリスマス会を実施し、フィリピンの路上の子どもたちからクリスマスカードを受け取り、国際理解を深めました。

スタディツアー・海外研修事業　～52 名が事業地を訪問～

今期、スタディツアーを 2 回、高校の海外研修を 1 回、1 日事業地訪問を 2 回実施し、計 52 名が参加しました。研修受け入れ規定を改定し、3 日間の研修から受け入れられるようになりました。

NGO 相談員事業　～6 件の出張サービスを実施～

富山、石川、大阪、静岡、岐阜において、教育機関やイベント等への出張サービスを計 6 件実施し、各地の参加者に対し、NGO に関する相談の受付や講演を行い、通常の相談と合わせ 629 件に対応しました。

NGO 外務省連携推進事業　～外務省資金提供制度の改定～

外務省と NGO の正式な連携協議の場である連携推進委員会において、外務省資金提供制度における一般管理費の拡充等について協議を行いました。また NGO 間での会合を開催し、意見集約に努めました。

インターンシップ事業　～インターンが各地で活躍～

マニラ事務所では、インターン 4 名がフェアトレードや路上の子どもの事業の補佐を行い、日本事務局では、インターン 3 名がフェアトレードや MY アイキャン事業を担当しました。

MY アイキャン事業　～路上や紛争地の子どもの街頭募金～

フィリピンの路上の子どもや、イエメン紛争地の子どもの活動の街頭募金活動を名古屋にて 5 回行いました。延べ 99 名のボランティアが参加し、合計で 554 名の方から 16 万円近くの募金が集まりました。

2018 年 2 月 21 日　Almashahad Alarabi、SahafaNet、Sada Almawaga、Yemen Press、Anba Yamania、Yamman News
タイズでの食糧提供について（6 件）
2018 年 3 月 8 日　在ジブチ日本国大使館（Facebook）　NGO 連携無償資金協力署名式について
2018 年 3 月 10 日　RTD TELEDJIBOUTI　NGO 連携無償資金協力署名式について
2018 年 3 月 14 日　朝日新聞　フィリピン事業、コープあいちとの連携について
2018 年 3 月 23 日　電気新聞　中部電力でのパネル展示について
2018 年 4 月 5 日　UNHCR　UNHCR と ICAN のパートナー契約について

日本政府とのプロジェクト開始

3 月 8 日、ジブチの日本大使館において、米谷光司大使とアイキャンジブチ事務所駐在員宗との間で、「日本 NGO 連携無償資金協力」の契約署名を行いました。本事業では、イエメンからの難民が多く暮らすマルカジ難民キャンプの子どもの保護の活動、難民の若者のライフスキルの向上研修、子どもの保護に関する施設の建設等が行われます。米谷大使からは、「今後とも日本政府は、アイキャンの活動を応援していく」との力強いお言葉をいただきました。

2017 年 11 月「書くことができるようになって嬉しい！」

＜ミンダナオ先住民の子どもたちの事業＞

ICAN マニラ事務所
高橋奈津子

アイキャンは、1996 年よりミンダナオ島各地の先住民の子どもたちの活動を行っています。活動は学校の建設や学校給食、先住民用カリキュラムの作成、学用品提供、保健教育や保健師の育成、収入を増やすための伝統工芸研修や環境教育、植林等多岐にわたります。今年度は、学用品の提供を行っており、2017 年は、これまでに同島ブキドノン州の先住民の子どもたち 1,023 名に届けることができました。

今月は、その学用品提供のモニタリング調査を行いました。まだ提供してから時間が経っていないため、数値的な変化を測ることはできませんが、子どもたちは、提供された学用品を大切に使用し、一生懸命勉強していることを確認することができました。子どもたちから、これまで筆記用具がなかった時と比べて、「書くことができるようになって嬉しい」という声や、「カバンが特にお気に入り」といった喜びの声を聞くことができました。保護者からも、お金がないために学用品を買いたくても買えなかったので、とてもありがたい、という声が多く聞かれました。

サルマヤグ小学校のダルマンドン先生は言います。「アイキャンが来るまで、子どもたちは文房具を持っておらず、私が自分のお金で買って渡したり、何人かの子どもで共有させたりしていました。でも、喧嘩が絶えず、また紙切れを友達からもらって文字を書いているので、次の日にはその紙をなくしてしまい、私たち教師がいくら宿題を与えてもそれに取り組む環境になく、授業もうまくいきませんでした。子どもたちは文房具を持つようになってから、授業中に私に言われたことを理解したり、忘れずに書いたりしておくことができるようになりました。毎日学校に来るときに笑顔になりましたし、学校を休むことも少なくなりました。アイキャンからもらったカバンを子どもたちはとても大切にしています。なくさないように名前を書いたり、汚れたときは水で洗ったりしているようです。」

先住民の住む山奥の地域には、未だ出生登録もされていないために統計上存在しない先住民の子どもたちが多く存在します。山奥に住む全ての先住民の子どもたちが教育にアクセスできる環境を整えるために、アイキャンはこれからもフィリピンの教育省や先住民の人々とともに活動し続けます。

路上の子どもたち　11 月 18 日／マニラ（フィリピン）

元路上の若者が「人との関わり方」について伝える

協同組合カリエのメンバー3 人が、路上の子ども 18 名に対して、「身近な人と、どのように良い関係を築くのか」についての路上教育を行いました。特に、喧嘩を暴力ではなく、話し合いで解決したり、人に対して優しくしたりすることの大切さを伝えました。カリエメンバーのリカ（18 歳）は、「子どもたちが学校に行ったときにも、今回の内容を活かしてほしい。」と話していました。

紛争の影響を受けた子どもたち　11 月 4、11 日／マラウィ（フィリピン）

マラウィの避難民へ食糧等の提供とモニタリングを実施

マラウィの 3 つの避難所において、計 353 名の国内避難民への食糧及び生活必需品の提供と、これまでの活動のモニタリングを行いました。避難民の方からは、「以前は、缶詰だけを食べていたが、アイキャンから調理用具等を受け取ってからは、温かい料理を食べられるようになった。」、「アイキャンから貰うお米はおいしいので、子どもが食べられるようになった。」などの喜びの声を聞くことができました。

NGO 相談員事業　11月 12-13 日／富山・石川

NGO 相談員として富山・石川に出張

日本事務局の職員が富山の国際交流フェスティバルで、来場した一般の方からの NGO への就職に関する相談や、富山に本部を持つ NGO からの資金調達に関する相談等に対応しました。翌日は、石川県にて、JICA 北陸や金沢国際交流財団等と連携方法について協議を行い、担当者からは「お互いの強みを生かした連携をしていきたい」とのコメントがありました。

国際理解教育事業　11月 1 日／愛知

ジブチ駐在員による帰国報告会

ジブチ駐在員の帰国に伴い、ジブチのイエメン難民キャンプにおける「子どもの広場」での活動や、難民キャンプで暮らす人々の様子についての帰国報告会が開催されました。参加者からは、「アイキャンの活動によって子どもたちが笑顔になっていることがわかった。」、「物理的にも遠いジブチで活動する職員の生の声が聞けてよかった。」などの感想がありました。

2017 年 12 月「小さな女の子にとっての大きな一歩」

＜紛争の影響を受けた子どもたちの事業＞

ICAN ジブチ事務所
宇佐美里子

アフリカのジブチ共和国にあるマルカジ難民キャンプには、約 1,300 人のイエメン難民の方々が海を渡って避難生活を送っています。ここで、アイキャンは 2015 年より、紛争の影響を受けた子どもたちが安心して、安全に過ごせる憩いの場として「子どもの広場」を運営してきました。毎週、平日 5 日間、イエメン難民の若者ボランティアが中心となり、スポーツやお絵かき等の様々な活動を通して、紛争で傷ついた子どもたちの心のケアを行うと同時に、子どもたちの学びの場を提供しています。

「子どもの広場」の活動に参加している子どもたちの中に、小学生低学年のファーティマちゃんがいます。彼女は極度の恥ずかしがり屋で、彼女にとって知らない人々が集まる難民キャンプでの活動に参加することは、とても勇気のいることでした。そのため、ファーティマちゃんは、常にお父さんにつれられて活動に来て、周りの子どもたちから「一緒に遊ぼう」と呼びかけられても、一緒に遊ぼうとはしませんでした。常に一人で遊び、お父さんのそばから離れることは、ありませんでした。そのような中、ボランティアや、同世代の子どもたちは、根気強く、ファーティマちゃんに声をかけ続けてきました。

この日は、小さな女の子にとって、大きな一歩を踏み出した日となりました。いつものように子どもたちは、ボランティアのお兄さん・お姉さんから用紙と色鉛筆を受け取り、友達と話しながら塗り絵をはじめました。そして、ファーティマちゃんも、いつものように一人で絵を描き始めました。他の子どもたちが、「ファーティマ！こっちにおいでよ！」とファーティマちゃんを呼ぶと、彼女は、笑顔になり、他の子どもたちのところへ寄って行き、一緒に塗り絵をはじめました。そして、この日を境に、彼女は、お父さんが呼びに来るまで、友達たちと遊ぶようになりました。

紛争で故郷を追われた子どもたちは、目の前で繰り広げられてきた辛い経験に加え、難民となり住処を追われることで、昔からの友達と遊ぶ機会を奪われ、自分の本当の気持ちを表現する機会も限られています。「子どもの広場」で、同じような境遇にある難民の若者や子どもたちが、ファーティマちゃんに声をかけ続けたように、ファーティマちゃんにも、他の難民の子どもたちの心に潤いを齎す存在になって欲しいと思います。

紛争の影響を受けた子どもたち　12 月 4-7 日／コタバト（フィリピン）

「平和の伝達と普及」について研修

26 名の MILF（旧反政府武装組織）メンバーが、地域レベルに平和を根付かせるため、平和について伝達・普及していくための活動計画を策定しました。参加者の一人は「バンサモロ基本法（ミンダナオ島のムスリムに自治権を与える法）は解釈が難解で、情報共有もしっかりなされておらず、意義を分かっていない人も多い。策定した計画をもとに普及活動を行い、平和のための基礎を築いていきたい。」と語りました。

紛争の影響を受けた子どもたち　12 月／イエメン

食糧提供へ向け準備着々と

イエメンの中でも激しい紛争が続く北部のハッジャ州において、国内避難民等 1,740 世帯への食糧提供を行なうために準備を進めました。

これまでは、提携団体が食糧を購入し、提供を行っていましたが、今回から食糧の購入から、アイキャンが行うため、イエメン人スタッフが業者を回って見積りを取ったり、費用を日本からジブチ経由でイエメンへ銀行送金したり、購入する食品の質をチェックしたりしました。

国際理解教育事業　12 月 15 日／愛知

同世代の難民の子どもたちについて伝える

津島市立北小学校での講演で、6 年生 37 名に対し、ジブチの難民キャンプにおいて、アイキャンが運営している「子どもの広場」の活動等について伝えました。

「自分の国を離れて避難しなければいけないイエメン難民の人たちの置かれている厳しい状況に驚いたが、アイキャンの子どもの広場で遊ぶ子どもが笑顔だったのが嬉しい。」等の感想がありました。

MY アイキャン事業　12 月 9 日／愛知

2017 年、最後の街頭募金

2017 年、最後の街頭募金は、ボランティア初参加の 3 名を含む 12 名で実施しました。

道行く人に大きな声で呼びかけ、用意したチラシを全て配布することができ、多くの方に、フィリピンの路上の子どもたちや、アイキャンの活動を知っていただくことができました。参加者からは、「小さな子どもも募金してくれたことが嬉しかった。」と感謝の声がありました。

2018 年 1 月「今日もみんなで『イエメン！』と叫ぶ。」

＜MY アイキャン事業＞

ICAN 日本事務局
インターン
柴田康平

昨年 12 月 20 日、イエメン紛争が始まって 1,000 日を迎えました。この紛争で約 5,000 人の子どもが死傷し、現在も 40 万人の子どもが深刻な食糧不足、180 万人の子どもが栄養不良に直面しています。「地球最大規模の人道被害」とも言われるイエメン紛争ですが、日本ではメディア掲載も稀で、多くの人々は紛争の存在すら知りません。アイキャンでは、2016 年 12 月からのイエメン避難民に対する食糧提供や子どもの保護活動に加え、2017 年 1 月からは、名古屋でイエメン紛争被害者への街頭募金を行っています。

1 月 13 日、4 回目となるイエメン街頭募金が行われ、40 人のボランティアが集まりました。過去 3 年間の平均約 20 人と比較して、その多さが際立っています。イエメン街頭募金を始めた当初、ボランティアから「イエメンはどこにあるのかも知られていないから、イメージすることも難しい」という声が聞かれ、街の人たちからも、「今回はフィリピンじゃないの？」といった質問も多かったのですが、1 月には街頭募金の最中に「イエメンね、頑張ってね」などの言葉も聞かれるようになりました。少しずつ、イエメンについて関心を持ってくださる方が、増えてきているように思えます。この日、139 人の方が募金してくださいましたが、それは、イエメンの子どもたちに平和に暮らしてほしいという意思表示でもあります。

アイキャンでは、ボランティアが中心となり、約 10 年もの間、名古屋で毎月街頭募金を続けてきました。学生や社会人、主婦等、いろいろな立場の方がボランティアとして集まり、参加者が多い時には、集合時間にエレベーターが混雑し、事務所がある 9 階まで階段で登ってきてくださるボランティアの方もいるほどです。毎月街頭募金を行うたびに、ボランティアと街頭募金寄付者約 150 名が、イエメンやジブチ、フィリピンの子どもたちの現状について触れ、思いを馳せる機会となっています。10 年間でどれだけのボランティアと寄付者が参加してくださったか私自身正確な数字は把握していませんが、本当に多くの方にとって、自分たちの「できること」の実践する場となっているのだと痛感しています。

イエメンの厳しい現状は、依然として、多くの人に知られていません。これからも、ボランティアの皆さんとともに「イエメン！」と叫び続け、いつの日か、日本社会で、イエメンのことが普通に語られるようになることを願っています。そして、いつの日か平和なイエメンを訪れたいと思います。

路上の子どもたち　　1 月 19 日／マニラ（フィリピン）

路上の子どもたちへの道徳教育

ドロップインセンターにおいて、「言葉」をテーマに子どもたちに道徳教育を行いました。何か言葉をかける時、自分がもし言われたら、ということを想像して相手を気遣うことができるよう、自分が今まで言われたことのある嬉しかった言葉、悲しかった言葉を挙げてもらい、言われた時の気持ちを共有しました。参加者の一人アリソン（11 歳）は、「路上で大人に悪い言葉を言われた時、とても悲しかった。だから自分はこの言葉を使わないようにする。」と話しました。

紛争の影響を受けた子どもたち　　1 月 20 日-31 日／ハッジャ（イエメン）

1,740 世帯への食糧提供を実施

イエメンの中でも激しい紛争が続く北部のハッジャ州の 2 つの郡において、国内避難民等 1,740 世帯への食糧提供を実施しました。食糧提供に先立って、国連の指標を使い避難民たちの食糧不足の現状を調査したところ、週 7 日間の内、平均約 5 日間は、満足に食べられていないという回答でした。また、飢えを凌ぐために、恥を忍んで他人に食べさせてもらうケースが一般的であることが分かりました。今回の食糧提供を受け、状況が改善したと、喜びの声が多く聞かれました。

NGO 相談員事業　　1 月 27 日／愛知

NPO 活動の取り組みを知る

日本事務局にて、名古屋女子大学中学校の生徒 10 名に対し、アイキャンの活動やイエメン・ジブチでの事業について伝えました。「自分とは住んでいる場所も環境も違って衝撃的だった」「少しの寄付で 1 人が救えるのなら、私も寄付したいと思います」等の感想がありました。また、「できること」のひとつとして、物品カウントのボランティアを実践してくれました。

MY アイキャン事業　　1 月 13 日／愛知

インターン生によるフェアトレード勉強会

世界と自分を身近に感じ、行動につながる学びを得てもらうことを目的として、インターン生による勉強会が開催され、学生・社会人の計 7 名が参加しました。

参加者は、アイキャンのフェアトレードの商品の背景を学び、ワークショップを通して身近な人にフェアトレードについて伝えられるようになりました。

2018 年 2 月「都市難民の子どもの活動が始まりました」

＜紛争の影響を受けた子どもたちの事業＞

ICAN ジブチ事務所
アブドゥラフマン

現在ジブチ共和国に住むイエメン難民約 3,500 名のうち、6 割を超える約 2,300 名が、首都ジブチ市に住んでいます。長期化する厳しい難民キャンプ生活に耐え切れず、家や仕事を求めてジブチ市に出てくるのです。しかし、ジブチ市において、難民への活動はほとんど存在しません。そこでアイキャンは、イエメン難民の子どもの保護事業を首都へも広げることにしました。

2 月、首都に住む約 30 名のイエメン難民の子どもたちを対象に、安心・安全に過ごせる場所を提供する「子どもの広場」活動を実施しました。事前の調査の時点で要望が多かったサッカーやお絵描き等の活動を行うことで、紛争で傷つき、日々の生活の中で強いストレスを受けている子どもたちの心のケアになると同時に、学びの場ともなることを目指しました。今回の活動の特徴は、若者や大人も積極的に活動に参加したことです。小さな子どもからは、「いつもは忙しいお母さんと一緒に、様々な色を使ってお絵描きができて、嬉しかった。」といった声が聞かれました。また、サッカーには 5～18 歳の男女が参加し、大人の男性もキーパーとして参加してくれました。活動に参加した周囲の大人たちは、スタッフと一緒に子どもの喧嘩を仲裁したり、子どもたちを見守りました。一方で、ただ自由に子どもを遊ばせる傾向も見られたため、スタッフが言葉の分かる大人にサッカールールを説明し、子どもたちの協調性や社会性を育みながら活動を進めました。

実施までには多くの困難もありました。例えば、ジブチ市の難民は散在して生活しており、「子どもの広場」を開催しようにも、どこへ行けばイエメン難民がいるのか、手探りの状況が続きました。いろいろ聞き回り、ようやく、難民が多く住む地域の情報を得られ、今回の活動に至りました。また、初めてアイキャンと関わることになった難民たちが、アイキャンの活動を受け入れてくれるのかも、最初は不安でした。活動への理解を得るために、コミュニティーの大人たちに活動目的を丁寧に説明する工夫をしたことで、 積極的な協力につながりました。こうして、ジブチ市での「子どもの広場」活動の実施が実現しました。

都市難民を対象とした活動は始まったばかりですが、アイキャンでは、子どもたちが子どもらしく安心した生活ができるようになることを目指して、今後も活動を継続していきます。

紛争の影響を受けた子どもたち　2 月 2 日／マギンダナオ（フィリピン）

平和教育を自分たちの手で広めるために

アイキャンの研修に参加した教育省が主体となって、管轄の学校長や教師 56 名に平和教育のオリエンテーション及び教育方法の研修を実施しました。

教育省のカリタさん(52 歳)は、「研修を通して平和教育の具体的な教授方法を学ぶことができ、研修で策定した行動計画を実施できて嬉しく思う。今後、平和教育をもっと各学校に広めていき、将来、子どもたちが平和を後押しする存在になっていってほしいと願っている。」と話しました。

紛争の影響を受けた子どもたち　2 月 14-22 日／ホデイダ（イエメン）

1,890 世帯への食糧提供を実施

ホデイダ州の国内避難民等 1,890 世帯（約 1.3 万人）へ食糧を提供しました。

提供品を受け取った一人フッセンさんは、「子どもが 7 人います。生きていくのは大変です。紛争で燃料がなくなったため、漁業ができず、仕事がありません。食糧提供してくれるような団体もなく、1 日 2 食しか食べられないこともよくあります。今回のアイキャンからの食糧提供で、家族みんなが毎日 3 食食べられるようになります。」と話しました。

NGO 相談員事業　2 月 14 日／岐阜

世界を考えるきっかけ作り

恵那市立中野方小学校の 6 年生、全 12 名に対し講演を行いました。フィリピンで路上生活をする子どもたちや、中東イエメンやフィリピンの紛争下で生きる子どもたちが置かれた現状や課題、現地での NGO 活動について、写真や子どもたちの声を交えて紹介しました。参加者からは「何がきっかけで NGO に入ったのか」、「他に関心のある国や課題は何か」といった質問があり、児童の世界への関心を喚起する講演となりました。

MY アイキャン事業　2 月 17 日／愛知

寒空の下、募金呼びかけ

紛争地イエメンの人々に対する活動のための街頭募金活動に、8 名のボランティアが参加しました。小雪が舞う中、小学 1 年生の女の子も一緒に呼びかけてくれました。参加者からは、「天候や歩行者の量に左右されないために、自分たちにできる工夫はたくさんあるのではないか」、「歩行者に関心を持ってもらえる声掛けが大事なのでは」といった感想もあり、今後の募金活動への課題を参加者間で共有し合うこともできました。

2018 年 3 月「貯金の習慣を身に着け、学校に通う子どもたち。」

＜路上の子どもたちの事業＞

ICAN マニラ事務所
Mariditha C. Mondares

アイキャンがマニラ市で運営するドロップインセンターには、7～17 歳の路上の子どもが日々20 人ほど通っています。その多くは、市場での野菜の皮むきや物乞い等で家族の生活を支えており、学校には通えていません。その中で、アイキャンは栄養ある食事の提供に加え、基礎的な読み書きや計算を教え、学校への復学を促進しています。2017 年は、9 名が復学しました（2017 年 9 月号）。

アリソン君（11 歳）は、復学前、家庭の事情で 2 年間学校へ通えませんでしたが、復学してからは、がんばって通い続けています。「自分は他の友達よりも勉強が遅れているから、字が読めなかったけど、学校を続けて徐々に読めるようになったし、書けるようにもなってきて嬉しい」と、勉強をすることの大切さと喜びを実感しています。また、「友達が優しいし、一緒にいて楽しい。お昼ご飯やおやつを買うお金が無いけど、先生がたまにくれることも嬉しい。」と、学校での楽しい時間について、話してくれます。この 3 月、彼は、3 年生への進学が決定しました。

しかし、復学しても、アリソン君のように通い続けるのは容易ではありません。職員のマヤさんは、「路上の子ども達は、通学に必要な服や靴、文房具が買えず、周りに対して劣等感を持ったり、家族の生活を支えるために路上での仕事へ戻ってしまい、通学を継続することは難しい」と言います。そんな子どもたちの悩みを解決しようと、この一年、「貯金箱プロジェクト」に力を入れました。

これは、一人ずつの貯金箱に、日々の路上での稼ぎから貯金し、お金は、通学に必要な物を買いたいと、本人がソーシャルワーカーへ申し出た時に引き出せる制度です。本来は、親が通学のお金を用意すべきですが、それができないために、みんなで考えました。子どもたちが日々の稼ぎから自由に使えるお金は数十円程度ですが、それでも、限られた稼ぎから自主的に貯金する習慣を身につけ、現在では多くの子どもが数千円以上貯めています。

アリソン君は、今はまだ、特に字を書くことが苦手ですが、アイキャンスタッフのエドガーは「新学期が始まる前にまた猛特訓を始めようね」と励ましています。

アイキャンでは今後も、1 人でも多くの子どもが復学し、教育を全うできるよう活動を続けていきます。

路上の子どもたち　　3 月 21･22 日／マニラ（フィリピン）

元路上の若者による路上教育

カリエカフェのメンバー3 名が、路上の子ども計 24 名に対し路上教育を実施しました。メンバーは、自分たちが路上で仕事をしていたときの経験を共有し、過去に自分がしてしまった悪い習慣や、良い行いなどを子どもたちへ伝えました。メンバーのリカさん（18 歳）は「幼い子どもたちへ路上教育を行うことは忍耐のいることだが、自分たちの経験を共有するのは大事なことだと思う。」と話しました。

紛争の影響を受けた子どもたち　　3 月 12 日／オボック（ジブチ）

イエメン難民障がい児への物資提供・貸与を実施

イエメン難民が住むジブチのマルカジ難民キャンプには、10 名前後の障がい児がいます。医者の推薦のもとに、その内の 6 名にリハビリ等のための物資提供や貸与を行いました。右半身麻痺で動きに制限のあるイブラヒム君（15 歳）へは、リハビリのための自転車が貸与されました。その後、アイキャンスタッフが付き添ってリハビリをする中で、「身体のバランスがよくなり、体調がかなり改善されました」と語りました。

スタディツアー・海外研修事業　　2 月 28 日-3 月 4 日／マニラ

現地への理解深めたスタディツアー

今春開催したスタディツアーに、総勢 19 名が参加しました。ツアー2 日目にはパヤタスのごみ処分場周辺の家庭や、フェアトレード商品を生産・販売している住民組織 SPNP を訪問しました。参加者からは、「家庭訪問で現地の人の声を聞くことができたのは、貴重な経験だった。」、「見たこと、感じたことをまわりの人に伝えていきたい。」、「自分のできる活動を 1 つでも実践しようと思う。」といった感想がありました。

国際理解教育事業　　3 月 31 日／愛知

フィリピン駐在職員による帰国報告会

フィリピン駐在員の一時帰国に伴い、ミンダナオ島でのマラウィ紛争に対する緊急救援活動や、平和構築活動についての帰国報告会を行いました。7 名の参加者からは、「フィリピンの抱えている問題の根深さについて考えさせられるきっかけとなった。」、「実際に現場で活動している駐在員の生の声を聞くことで、現地での活動をより鮮明に理解できた。」などの感想をいただきました。

2018 年 4 月「カリエカフェの大きな決断」

＜路上の子どもたちの事業＞

ICAN マニラ事務所
May Ann Z.
Prudencio

およそ 30 名の路上の若者たちによって成り立つ協同組合カリエは、2016 年 11 月よりケソン市にある国立フィリピン大学内にて、パンやパスタ、飲み物を提供する「カリエカフェ」を運営しています。カリエとは、タガログ語で「路上」という意味を持つと同時に、「若者たちによる、路上生活からの脱却を目指した、安定した生計を立てる為の」カフェという意味があります。

この日、アイキャンとカリエのメンバーで今後の経営についての話し合いがもたれました。売り上げが昨年度と比較して伸びてはいるものの、依然として黒字には至っておらず、私たちは、このままでは、カフェの経営が危うくなってしまうと危機感を持っていました。話し合いでは、ここで一度立ち止まり、より抜本的に収支を見直していく方向性が決定し、具体的な論点は 2 つに絞られました。

1 つ目は、パン販売の可否についてです。カリエカフェの原点は、2010 年から始まった路上の子どもたちがパン作りを通じて、協調性や社会性を身に着ける活動に遡るため、パン作りはカリエにとってアイデンティティとも言えます。しかし、コスト面では、パンを製造するためにカフェとは別の場所を借りる必要があるために、家賃や光熱費等の支出が経営を圧迫していました。思い出もたくさんあり、苦渋の決断ではありますが、最終的には、まずは黒字を目指すという共通目標のもと、パン販売は一旦停止し、利益率の高いおにぎりの販売やデザートを中心に新たな商品を提供していくことが決まりました。

2 つ目は、カリエのメンバーが、まだ若く、経験も限られるために、ランチの時間帯のおかずの調理がうまくできないという課題についてです。こちらは、アイキャンの別の事業地であるパヤタスごみ処分場に住むお母さんたちにもカフェの運営に入ってもらえないか打診することになりました。まだ決定事項ではありませんが、両者が協力して、ともに生活を向上できれば理想だと思っています。カリエ代表のジョアンさんは言います。「お金の管理について計算をしたり、方向性を考えるのは難しいことだし、責任も大きいです。」副代表ジョネルさんは「カリエを大きくしていき、将来カリエスタッフへより多くの給与を支払えるようになりたい。また、現在のカリエスタッフだけでなく、今でも路上で生活している若者へ、カリエを通して雇用を創出していきたい。」と意気込みを見せています。

紛争の影響を受けた子どもたち　4 月 17 日／オボック（ジブチ）

日本の遊びで子どもたちの心を癒す

「紛争で傷ついたイエメンの子どもたちの心の傷が少しでも癒えることができるように」と愛知県の生徒の方々から動画で紹介してもらった日本の遊びを「子どもの広場（CFS）」で活用します。参加者の子どもたちから、「初めての遊びで、楽しかった。教えてくれてありがとう。」などの声が聞かれました。今後も引き続き、様々な遊び等を取り入れ、活動に活かしていきたいと思います。

紛争の影響を受けた子どもたち　4 月 19 日／ピキット（フィリピン）

平和アドボカシー会議が開催されました

4 月 19 日（木）に、教育省ソクサージョン地方事務所の担当官、州事務所の担当官、校長、アイキャン等合計 25 名の関係者が集まり、「平和教育を通した学校の変容」等について話し合いました。平和教育を導入した学校では、子どもたちの出席率の向上、退学率の減少、子どもの成績の向上等の変化が確認されており、このような変化にアイキャンが貢献しているとのコメントをいただきました。

MY アイキャン事業　4 月 21 日／愛知

フィリピンの路上の子どもたちを応援する街頭募金活動

10 年前から毎月実施している名古屋栄での街頭募金に、19 名のボランティアの方々が参加し、150 名の方がご寄付をしてくださいました。この日は、2 チームに分かれて、募金のお願いの呼びかけを行った結果、多くの方々が、足を止めて下さり、アイキャンの活動についてご質問して下さったりしました。高校生の N さんからは、「これまでの街頭募金活動やアイキャンの活動の広がりを感じました」との感想がありました。

MY アイキャン事業　4 月 14 日／愛知

WECAN によるフェアトレード勉強会

アイキャンのボランティア団体、「WECAN」が自主イベントとして、フェアトレードに関する勉強会を行い、社会人 6 名が参加しました。実際に、アイキャンのフェアトレード商品を 1 つ 1 つ手に取りながら確認するとともに、パワーポイントを使用して生産者に関する知識を深めました。参加者からは、「今後もアイキャンと深い関りを持って、自分ができる活動を積極的に行っていきたい。」との感想を頂きました。

～児童養護施設「子どもの家」拡張用ご寄付のお願い～

―より多くのマニラの路上の子どもたちが、危険な路上から出て生活ができるように―

路上での生活

児童養護施設「子どもの家」（現在は１階のみ完成）

寄付の用途：児童養護施設「子どもの家」の２階部分が完成すると、30 名から 50 名の身寄りのない子どもたちが、愛情溢れた環境で生活し、通学することができます。ぜひ、ご寄付をお願いいたします。
建設の期間：2018 年 10 月～2019 年２月　必要金額：約 1,000 万円（490 万ペソ）

■ご寄付の方法■

1、クレジットカード　今すぐお手続きできます。https://kessai.canpan.info/org/ican/

2、口座引き落し　会報同封の「振込用紙」または、下記サイト（お電話、メール）でのお申し込みをお願いします。
http://www.ican.or.jp/j/my_ican.html

■寄付の種類■

1、通常のご寄付　～好きなときにいつでもできる～
「路上の子ども」特別寄付：クレジットカードでは、１口 5,000 円からのご寄付を受け付けています。

2、マンスリーサポーターになる　～継続的に応援～
毎月 1,000 円（1 日あたり約 33 円）から任意の定額を寄付してくださる「マンスリーパートナー」を募集しています。
パートナーの皆さまの誕生日には、事業地の子どもたちから素敵なプレゼントが届きます。

アイキャンは認定 NPO 法人のため、寄付者は、税制の優遇を受けることができます。

税額控除の額：その年の認定 NPO 法人等への寄付合計額（※）－2,000 円×40%　※所得税額の 40%が上限
詳しくは、国税庁のサイト（https://www.nta.go.jp/taxes/shiraberu/taxanswer/shotoku/1263.htm）又はお近くの税務署へ

―マンスリーパートナーさんのご紹介―　石田理紗さん　「フィリピンの子どもたちと出会って」

大学時代の友人の紹介でアイキャンのスタディツアーに参加しました。２泊３日、参加した仲間とフィリピンの子どもたちと生活を共にし、もっとこの子どもたちのために何かをしたいと考え、マンスリーパートナーとしてアイキャンの活動を支持することにしました。フィリピンで出会った子どもたちは、厳しい環境で生活しているにも関わらず、曇りのない笑顔を持っており、それが今でも忘れられません。また子どもたちに会いに行きたいです。厳しい環境下でたくましく生きる子どもたちの未来を、これからも応援しています。

集めています！～書き損じハガキ・未使用切手・商品券～

未投函の官制ハガキや年賀ハガキ、未使用切手、未使用テレフォンカード、商品券を、送ってください。
ハガキ１枚が、フィリピンではノート２冊分、又はご飯２杯分の価値のご寄付になります！

認定 NPO 法人アイキャン　平成 22 年度外務大臣表彰団体　　**フェイスブックに「いいね！」をお願いします！**

アイキャンは 1994 年より、貧困削減や紛争解決等に取り組む国際 NGO です。

住所：　〒460-0011 愛知県名古屋市中区大須３丁目 5-4 矢場町パークビル９階
TEL&FAX：　052-253-7299（火曜～土曜：12～19 時）　MAIL：　info@ican.or.jp
Website：　http://www.ican.or.jp/　Facebook：　https://www.facebook.com/ICAN.NGO

イロドリ
印刷通販
印刷 イロドリ SEARCH